

ロヒンギャ難民の家族捜す

あなたの愛する人はここにいます。東京都杉並区の若手写真家が、ミャンマーからバングラデシュに逃れたロヒンギャ難民の肖像を撮り、インターネット上に公開している。武力衝突時の混乱などで生き別れになった家族に見つけてもらい、再会につなげるプロジェクトだ。

(神谷円香)

愛する人私を見つけて

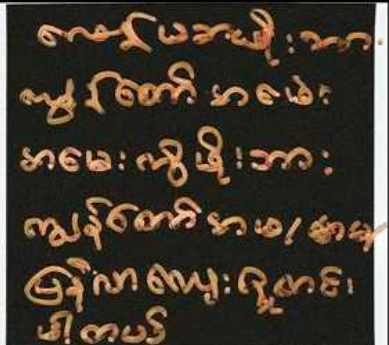
「LETTERS TO YOU(あなたへの手紙)」と題し、写真家の苅部太郎さん(26)が開設したサイトには三十枚の写真が並ぶ。昨年十一月、バングラデシュ南東部に点在する難民キャンプを回り、二週間かけて撮った。あえてインスタントカメラを使った。気温が四〇度に達する中で写真は溶けかけたり、色あせたりした。土ぼこりや被写体になった人の指紋も付いた。それがデジタル写真にはないリアリティーを生み出した。通訳を介し家族と別れた

父親を捜す十歳の男の子は「お父さんはよくチョコレートを買いに連れて行ってくれた」と話した。「自分もそうだったな」と思い出し、どこにでもある日常が壊された現実を感じた。愛知県出身。「人と人を隔てる境界線はどうしたら越えられるか」を考えてきた。南山大在学中、イスラ

や家族を殺され、少女は「家族に戻ってほしい」と話した



ロヒンギャ 仏教徒が9割のミャンマーで、西部フカイン州を中心に暮らすイスラム教徒の少数民族。先住民と見なされずに国籍がなく、市民権を求めている。昨年8月、ロヒンギャ武装勢力とミャンマー軍などが武力衝突し、約100万人と推計されるロヒンギャのうち68万人以上が隣国バングラデシュに逃れ、難民生活を送っている。



「家族に戻ってきてほしい」

杉並の写真家 バングラデシュキャンプで撮影

エルとパレスチナを隔てる壁のルポを書いた。銀行に勤めながら写真を勉強し、二〇一五年に写真家として独立した。

昨年、ロヒンギャ難民のニュースに触れた時、「遠い、抽象的な概念にしか思えなかった」。東日本震災の被災者には、会ったことがなくても無条件で心が痛んだのに。「ロヒンギャを構成する一人一人が実在する感覚」を自分自身も得たくて現地に向かった。撮りたかったのは「具体的に被写体のためになる」写真。報じるだけで終わるのは嫌だった。「同情だけでは行動に結び付かない。ネットで写真を拡散してほしい」と呼び掛ける。

現物の写真は、中央区銀座七のギャラリー「ガーデン・ガーデン」で十三日まで展示中。開館は午前十一時〜午後七時、日曜休館。ネットで特設サイト「Letters To You Project」で検索を開いているほか、フェイスブック・インスタグラムのアカウント「Letterstoyoujp」でも写真を公開している。



ロヒンギャ難民を撮影している苅部太郎さん=東京・銀座で